

目次	1	損保ジャパン寄付講座 国際シンポジウム「リスクマネジメントと公共政策」[西村智子]
	2	研究室の窓から [西沢利郎] / Fukushima and Honest "I" [Gaye Kim]
	3	学生インタビュー [鈴木雄士郎さん + 和田 周さん]
	4	Pre-Graduation Ceremony and Reception / トピックス

損保ジャパン寄付講座

国際シンポジウム
「リスクマネジメントと公共政策」

株式会社損害保険ジャパン 西村智子 (執筆当時 公共政策大学院客員研究員)

2013年9月18日、国際シンポジウム「国民の診療データは私たちの健康と社会を救うか」が開催されました。新技術導入決定に関する議論を通じ、医療ICT (Information and Communication Technology) の日本社会への組み入れ方を考えることを目的とした企画です。

本大学院の鎌江伊佐夫特任教授から、医療に関するエビデンスが参照される際、意思決定者である社会と個人の両者のバランスのとり方が重要であり、対象に合わせた情報提供が重要であるという指摘がなされました。

パリの大学病院連盟付属の医療技術評価機関CEDITのAlexandre Barna氏からは国家と先端医療機関が担う技術評価の違いや制度変化について報告がありました。限られた財政下の優先順位設定においては情報が重要な役割を持つという言及がありました。

桑名市副市長の田中謙一氏は、ドイツの社会保険・医療被保険者番号の運用と桑名市の医療福祉介護連携についてご紹介くださいました。公私立病院を統合する全国初のプロジェクトなどハード面の整備とともに、他職種間の「顔の見える関係づくり」や情報共有などソフト面の必要性など、思いを熱く語られました。

東北大学医学系研究科の中谷純教授からは、医療情報喪失対策として東北で進められている情報連携のご紹介があり、日本社会全体への展開や日本発の標準医療パッケージ提供を目指す東北医療情報ハイウェイビジョンのほか、情報連携の平時利用の重要性、セキュリティや利便性を確保する仕組みが紹介されました。

オランダで診療録データベース企画を担うNICTIZのMichiel Sprenger博士からは、オランダにおける医療データベース運用の歴史とその現状、及び将来の展望についてお話がありました。プライバシーの観点から、受益者負担で任意参加のシステムが民間機関により運用されています。医療の標準化、患者・疾患特有情報ストックに活用できる一方、情報の再利用、技術評価、保険償還への活用

も残っているとのことで、高い付加価値を持つ仕組み作りに向けた抱負が語られました。

星槎大学の細田満和子副学長からは、国民の意識調査結果から、医療情報は重要ではあるものの自己管理が難しく、国の費用負担で医療者による管理を望む国民の声が紹介されました。

ディスカッションでは、事務の効率化や意見調整に資する客観的データなどの導入のメリットと同時に、推進のボトルネックである個人情報保護と費用負担が示され、国民が利便性を実感できる施策の重要性について言及がありました。



本シンポジウムは2期6年にわたる損害保険ジャパン寄付講座の最後のイベントでした。私も10月から損害保険ジャパンに戻り、海外子会社が保有するリスクのコントロールを担います。本シンポジウムをはじめ、これまでの当該寄付講座の活動にご協力くださった多くの方々にご場を借りて御礼申し上げます。

「下駄ばき」教授の心意気



教授

西沢 利郎

7月にGraSPPに着任してから3ヶ月。30年ほど前、学者の道を模索した時期もあったが、結局、公的金融の世界で働くことになった。これまでも研究者の方々とお付き合いし、非常勤で教鞭をとる機会があったが、自分が教授職に就くなど想定外の出来事だった。30ヶ国・地域の留学生が集う国際社会の縮図のようなGraSPPで、若い人たちと交流し、あるときはリードしつつも、教えられるほうが多い今の生活は幸せだと思う。

政府系金融機関で公共政策の一端を担ってきた。その間、外務省への出向に始まり、国際通貨基金、世界銀行など複数の機関でスタッフとして働く機会にも恵まれた。とても充実した日々だったが、身が縮む思いをしたこと、悔いていることも少なくない。大学に身を置く今、こうした体験を社会に還元したいとの思いが募る。実体験に基づく知識や知恵のみならず、数多くの人たちと接するなかで形成され、今も続いている人とのつながりも引き継ぎたい。

GraSPPでは、国籍に関係なく多くの在学生在が、元気に、自由な発想で、それぞれ強い動機づけで日々過ごしている。だからこそ、やや野心的なきらいはあるが、思い切って大きなテーマを設け、学生に問いかけている。今学期は新興アジア諸国にとっての新たな発展パラダイム、国家債務の歴史と将来展望の問題を取り上げている。来学期は再び経済・社会インフラ整備の官民連携モデルについて論じたい。

私は自称「下駄ばき」教授だ。実務経験はあっても、教授に相応しい学識を欠くがゆえに下駄をはかせていただいているという意味で使っていた。しかし手前勝手に、下駄をはくまでわからないという意味に転じれば、大きなひと仕事のチャンスがあるということかもしれない。社会人生活を始めて30年ほど経ったが、これから新たにまとまった仕事に取り組み、公共に役立つ成果に仕上げたいと考えている。GraSPPの若者にはまだ負けてられないぞっ……と、やや大人げない心意気で生きていこうと密かに決心したところである。

Fukushima and Honest "I"

Gaye Kim Campus Asia Program

Prior to coming here, I have once visited Japan around late February and early March of 2011. After my pleasant trip to Tokyo, Kyoto and Osaka, I left Japan on March 10th with the hope of returning back someday. It was the day before the devastating earthquake and tsunami stormed the country and left a permanent mark in Japan's history. Back in Korea, I watched in disbelief at the seven o'clock news as huge tidal waves engulfed the coastal areas of Fukushima prefecture, recklessly and relentlessly destroying homes, buildings, sweeping away cars and trucks, as debris were washed away on the shore of nothingness. I felt sympathy for the Japanese people, especially those affected by the earthquake, who were in agony and distraught by the aftermath of the disaster. Soon after, news reports on the power plant breakdown and radiation leakage bombarded headlines, and a feeling of terror lingered for the future of the people's wellbeing and safety in the region. Korea's media began to expose Japanese government's inadequate response to the nuclear emergency, its futile attempt to stop the leakage, and the detection of high level of nuclear activity in the surrounding waters.

I didn't think I'd be back in Japan two years after my first visit to Japan,



Author is on the left.

during which Korea - Japan relations was in predicament as tension heightened because of historical and territorial conflicts. Coming here, I was warned by many of the danger of being over exposed to nuclear radiation and was told to be careful when consuming possibly "contaminated" food produced in Fukushima. Much discussion was held on the decline of Japan and the crises Japan is now facing. Still, I find Japan to be a fascinating and admirable nation at the forefront of development in Asia. My determination to know Japan did not stop me from applying Campus Asia Program, hence my decision to attend the Fukushima trip during the Campus Asia Summer School, after much hesitation and consultation with the students and staff members who organized it.

Many people, including myself, thought Fukushima to be an inhabitable, a radioactive wasteland. This was not true as we saw children running around, people riding their bicycles and cars driving past like any ordinary town in Japan. Yet, the city was undergoing recuperation after the disaster as houses were being reconstructed. As we toured around the city in the bus, we witnessed much of the land along the coastline washed away by the tsunami. A 4km circumference was drawn from the inactive Daiichi power plant as a restricted area, the nearest distance we were able to reach was 4-5km away from the power plant. We also visited a farm where an environmental activist kept several contaminated cows in a fenced farm to oppose slaughtering of innocent animals. Later, we interviewed inhabitants of Minami-soma city who told us of their experience during the event, and how they managed to pick up from what was left and coped with the challenges ahead. I was moved by their stories and admired their courage for remaining in the city despite the risks and dangers.

The Fukushima trip triggered quite a few thoughts and emotions. As a Korean, I felt sorry for the people of Fukushima because of the

学生

Student Interview インタビュー

第

15

回

— 鈴木さんはシアンスポ（パリ政治学院）、和田さんはLKY（シンガポール国立大学リー・クアンユー大学院）のダブルディグリー留学から帰国されました。

鈴木（以下鈴）：慶應義塾大学経済学部では欧州経済協力を専門に学んでいましたが、深く学ぶうちに、経済だけではなく政治、法律などさまざまな分野も包括的に学びたいと思いました（これはGraSPPに進んだ理由でもあります）。今回は4度目の留学ですが、今まで行ったのがアメリカとイギリスだったので、非英語圏を選びました。

和田（以下和）：早稲田大学法学部では国際法を専攻し、同時にアジア太平洋研究科の教授のゼミに参加させていただく中で、アジア太平洋地域に置ける安全保障に関心を深めたことがきっかけです。GraSPPでも国際法の授業や飯村豊先生の東南アジアの外交政策の授業をとるうちに、国際法に関連する問題として、人権保障や海洋安全保障の確保について、東南アジアを中心とする様々な実務家と議論してみたいと考えました。

鈴：授業ではキャップストーン・プロジェクトが印象的でした。指導教官の許、生徒5人程度でチームを組み、OECDをクライアントにOECD加盟国の土地利用について調査するものでした。5年間のOECDプロジェクトのパイロット版という扱いです。土地利用で対極にある国であるオランダ（土地利用先進国）とアメリカ（土地利用未発達国）を取り上げることにしました。両国で取り組み方や指令系統がまったく異なるので、国ごとの対応法や特徴、OECDは今後どう調査を進めていくべきか、できるだけ担当に近い人に話を聞くのがコツなど、詳しく記載した70ページほどの報告書を作成し、OECDに提出しました。私はアメリカを担当したのですが、会いたい人に電話やメールで面談を依頼するだけで一苦労でした。メールの返信率は1割程度、電話の反応も省庁によってまちまちでした。GraSPPも、このCapstoneのような授業・プロジェクトをもっと拡充していくべきだと思います。事例研究で同じようなことを行っているようですが、このノウハウ、プロセスを習得して実地に移すことが公共政策の真骨頂だと思います。学生側がアクティブに働きかけてこそ、充実したものになるはずです。

和：LKYにも同様のPAE（Policy Analysis Exercise）というものがあり、4月に研究成果の発表会をクライアントを招いて行いました。一緒に組んだのはポーランド人で、クライアントはCommonwealth Human Rights Initiativeという英連邦の人権NGOのインド事務所でした。ところが、研究対象の絞り込みや現地調査の依頼のメールを送っても1ヶ月ほど音信がなく、指導担当のインド出身の先生に督促してもらいました。その後は、インドの人権NGOと政府の関わり方について現地でのインタビューを行う際に、国際機関、インド政府や、研究者、人権NGOの連合の代表者等紹介していただきました。

今のインドの国内の人権状況は人権NGOから批判されていますが、インドは世界人権宣言や国際人権規約の起草に寄与したことに誇りをもっています。ガンジーが「非暴力、不服従」で独立を勝ち取った国であり、多大な外交努力を払って世界人権宣言や国際人権規約の成立に寄与したという誇りが脈々と受け継がれています。

留学していたシンガポールは、事実上の独裁という点で「民主主義万歳！」という国ではありません。しかし、国民との対話の機会を設けながら、迅速な意思決定を行うというバランス感覚を持っています。シンガポールでは原発を導入する必要がないのに原発をめぐる議論が起こっています。マレーシア、インドネシア、ヴェトナムといった周りの国が原発の開発を進めていて、これらの国に技術的優位に立たれる危機感が原因です。シンガポールは会議外交で成り立っているので、原子力開発の会議を開催する主導権はつねに握りたいと思っているのも一因です。

鈴木雄士郎さん



MPP/IP 2年

和田周さん



公共管理コース 2013年度修了

— フランスとシンガポールの食生活はどうでしたか？

和：シンガポールのインド料理店は、インド人に言わせると「ゲテモノ」だそうです。シーフード・カレーなどあり得ません。プラタを食べに連れていかれて「これが本物だ」と言われました。

鈴：フランスでは税率が安い必需品の定義が独特で、パンとチーズとワインは必需品ということで税率が安く、肉と魚は必需品ではないので税率が高くなっています（笑）。仲間どうして、いくら出せばそれなりにおいしいワインが飲めるのかを調べたことがあります。結論は8ユーロでした。20ユーロだとかなりおいしいワインが飲めます。

日本のお酒はフランスで高評価です。フランスの立派な酒屋の店主の方に、日本のシングルモルトの素晴らしさについて熱く語られたことがあります。チーズのディップにジュレを出す高級なフランス料理店があるそうですが、そのジュレに日本のウイスキーが使われていると聞きました。

— お二人とも就職は決まりましたか？

和：日本貿易振興機構（JETRO）に決まりました。日本で仕事をしたいという希望と、国際機関で働きたいという希望がうまく一致しました。JETROの面接官が自分に似ていたので、肌合っているなあ、と。その方は疲れていたにもかかわらず、私の話を熱心に聞いてくれました。私自身、就職活動で短期間でシンガポールと日本を何度も往復して疲れていたため、それだけに嬉しかったのです。

組織に自分がどう貢献できるかだけでなく、自分の仕事が社会にどうつながっていくのか見えるところで働きたいし、そういう意識がある上司と一緒に働きたいと思っていました。それが叶うと思えたのがJETROでした。

鈴：私は日本銀行です。政策立案に興味が出てきたこと、機会があれば国際機関で働きたいので日本銀行ならその実現可能性が高いと思ったこと、「国際化」にたいして明確なビジョンを示してくださったことが主な理由で。「国際化って何ですか？」と聞くと、ありきたりな答えや曖昧な答えしか返ってこない企業もありました。私も就職先は「人」で決めました。どの組織が合っているか、入ってみるまでわからないのだから、その組織にいる人で決めたいと思いました。

（インタビュー・文責 編集担当）

Continued from Page 2

exaggerated interpretation and biased attitude portrayed by Korean media. It is very unfortunate to see that that point of contention lies on the guesstimate of the radiation level as both sides pounce at each other based on each subjective interpretation. It may be the case that the Japanese have a low estimate and the Koreans have a high estimate of the nuclear radiation. Thus, the real issue here isn't which argument on the level of nuclear radiation is more compelling. It is more important to realize how policy makers introduce preventive measures to resolve the crisis, and how the international committee should work together to build trust. Instead of shunning the truth, Korean and Japanese people need to have a broader understanding of the problem, and to acknowledge both sides of the argument. On the other hand, I would also like to ask my Japanese friends. If it were the alternative scenario, in

which it was Korea, not Japan, that suffered the great disaster, would the situation have been any more different? Would Japan have warned its people of visiting certain locations in Korea and imposed trade sanctions on certain importing goods from Korea?

Suffice it to say, my concern for the future of Fukushima, Japan and the region remains, and truth be told, I am still not quite convinced by the Japanese government that everything is safe and under control. This is what I choose to believe for my own comfort, not based on nationality or representation. I continue to tell my family and friends in Korea that the situation is not bad and they should come to this wonderful country. It is my sincere hope that both Korea and Japan, along with China, continue to foster good relations for future peace and prosperity in the region. I am grateful to my lovely Japanese friends and staff members at GrasPP for planning an unforgettable trip to Fukushima.

Pre-Graduation Ceremony and Reception

@Kojima Hall and Capo PELLICANO Hongo, August 1, 2013



- Master of Public Policy, International Program (MPP/IP) のホームページを開設しました。
- プログラムの内容、カリキュラムに加え、入試情報や奨学金プログラムを紹介した充実したコンテンツとなっています。MPP/IPの魅力凝縮した動画も掲載しています。イベントや入試などニュースも随時更新していきますので、ぜひアクセスしてみてください。
- <http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/en/mppip/>

国際企画チーム プログラムマネージャー 小川琴子



学生インタビューや学生の寄稿記事には、毎回はっとさせられます。今回の大きな収穫は、原発(事故)に関する国内外の視点の違いでした。紙幅の関係で割愛せざるを得なかった話も多いのですが、物事を重層的・多面的に見るための武器をもらいました。(編集担当)

NEWSLETTER [編集・発行] 東京大学公共政策大学院
第34号
GRADUATE SCHOOL OF PUBLIC POLICY
THE UNIVERSITY OF TOKYO

[発行日] 2013年10月29日

[デザイン] 安孫子正浩(水蒸気図案室)

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 tel 03-5841-1710 fax 03-5841-7877
E-mail grasppn1@pp.u-tokyo.ac.jp <http://www.pp.u-tokyo.ac.jp>